

棄 民

山岡 紀代子

政府より引揚げ証明届きたり今し六十五歳の我に
長崎に被爆せし夫と満州を彷徨ひし我の八月九日
満州に我と紙一重の運命^{きだめ}分け父母探す残留の子ら
牡丹江のいつこの果てにか眠る母恋ひて弟は海を渡れり
我の一生いつの頃から狂へると信置きかねて棄民と拗ねき
引揚げの舟底に眠る乙女子は毬栗頭にをとこ服着て
内地まで連れて戻りし母の骨引揚げ列車に盗りし人あり
「支那の児は売られてゆきます上海に」毬つき唄にわが魘さるる
父・子のみの引揚げ姿に「おかえり」と祖母は瞬時に娘の死を悟る
胸を病み引揚げ途路の武漢にて逝きたり母と末の弟
内地に待つ伯母への手紙に乳足りぬ身の悲しきと書きし母はも
舞鶴の岸に打ち寄する波の彼方母の眠れる満州はあり
引揚者記念館より望む海遠くて近し旧満州は
母の位牌抱きて下船舞鶴港父の無念を継ぎて生き来し
六十余年隔てしもなほ孤児といはるる残留の人に故郷あらず
残留の孤児に日本の犯したる罪いふなくて繁栄の国

棄民なりしことは言ふまじ満州は父の夢なりしわがルーツなり

吾の胸の肋膜にいささかの翳ありと母と同じき命生きゆく

ああ満州いま中国の地に立てり吾が^わ生れし^あ国母眠る国

母眠る大地に続く中国の土の^{ひとくれ}一塊抱きて還らむ

満州の凍土に若く眠る母面差し似たる娘の嫁姿

初節句の我を抱きし写絵の母を恋ひつつ紙の雛折る

<解説> 山岡紀代子（やまおか・きよこ）さんは1940年（昭和15年）、旧満州の牡丹江で生まれた。前年の1939年、一家（旧姓・有賀）は、長野県上伊那郡辰野町沢底より牡丹江に移住された。父親は満鉄関係の仕事。1945年日本への引揚げの途上、母と次弟を亡くされている。93年頃より短歌を始められ、03年NHK全国短歌大会で特選。05年短歌結社『国民文学』に入会された。『国民文学』は与謝野鉄幹の流れを汲む窪田空穂が責任編集者となり、小説・文芸評論・美術に関する月刊誌として1914年に創刊され、第7号より歌誌となった。『国民文学』の歌風は創刊以来、生活実感を重視した写実詠であるという。「棄民」は、07年『国民文学』特別作品に入賞した。上記の22首は、特選歌に数首を加え、棄民意識から希望への思いを詠ったものである。

今回、山岡さんとの縁をつないでくださったのは、この夏の「歴史検証の旅」にご夫婦で参加された小柳さんである。参加者全員に旅の思いなどを会報に寄稿してくれるようお願いしたところ、小柳さんからは「山岡さんの歌の想いを胸に抱いて旅に参加した。その歌を載せてほしい」との要望があった。

小柳さんは山岡さんの「春の気をしつとりふふむあかときを独り占めして朝刊配る」という歌が、新聞配達で生計を支えてこられた誇りと喜びが溢れていて好きだという。じっくりと山岡さんの歌を味わっていただきたい。（大類善啓）